

福島県特別支援教育振興会いわき支部主催フォーラム

～障がいのある児童生徒の避難の現状と課題～

報 告

主 催 福島県特別支援教育振興会いわき支部

後 援 いわき市

福島県立平養護学校父母と教師の会

福島県立いわき養護学校父母と教師の会

福島県立聾学校平分校父母と教師の会

福島県立富岡養護学校父母と教師の会

期 日 平成25年10月2日(水) 9:30～11:30

場 所 いわき市総合保健福祉センター 多目的ホール

参加者 約70名

趣 旨 障がい児とその家族が震災時の動きや学んだこと、求めたことを知り、障がいを持つ子どもに対する地域の役割、機能、対応を考える機会とする。

進 行 総合司会：小野寺 典子(理事)

1 開会あいさつ 千島 茂(県立いわき養護学校父母と教師の会会長)

2 基調報告 大谷 明(支部長)

3 フォーラム

コーディネーター 大谷 明(支部長)

コメンテーター 山崎 亨(県立平養護学校長)

箱崎 孝(前県立いわき養護学校
父母と教師の会会長)

門馬 榮(県立富岡養護学校教頭)

諸橋 義隆(前いわき市議会委員)

遠藤 正則(いわき市障がい福祉課長)

・フロア発表、コメント

・コーディネーターによるまとめ

4 閉会あいさつ 高橋 洋(県立平養護学校父母と教師の会会長)

基調報告及びアンケート結果報告

●アンケート調査実施の趣旨・経過

振興会いわき支部は、平成23年3月11日の大地震・巨大津波とその直後の東京電力第一原子力発電所の事故後の市内特別支援学校の被災状況や幼児児童生徒の安否確認、その後の教育活動について、また、原発事故後の避難状況についてアンケート調査を実施しました。

その対象校は大震災で当市に避難・仮校舎を設置した県立富岡養護学校を含めたいわき地区にある特別支援学校四校の幼児児童生徒の親御さん、特にPTA役員さん方100名を中心に平成24年10月から同年12月の期間で調査を実施し、56%の回収率で、それは、4校の全幼児児童生徒の約14.8%になりました。その概要を以下にご報告します。

1 児童生徒の地震発生時にいた場所では1番多かった回答は移動中で64.2%、次いで学校にいたが19.6%、3番目は自宅で16.0%でした。

移動中の大震災遭遇に大きな課題があることが示されました。障がいのある子供たちの下校時における安全対策を検討する必要があると思われます。

2 一方、親御さんはその時どこにいたかという質問では、勤務先の職場にいたが46.4%、幼稚園や施設、学校、わが子の下校迎えの途中が35.7%でした。

これは子供たちは下校・移動の時間帯、親御さんも移動

や勤務時間帯という相互の安否・連絡の確保がきわめて困難な状況だったと思われます。

3 災害発生時の親子の連絡状況は、すぐに相互確認ができたのは56.1%、すぐにはできなかったのが41.0%でした。

この項では避難先で数日後にやっと会えたという場合も多く、実際にお互いに目で見て安否を確認するに至るまで様々な経緯があったことが浮き彫りになりました。障がいのある子供とその親の避難と相互確認の難しさを示しています。

4 連絡が取れなかった主な理由としては、携帯電話の不通が56.1%でした。

大震災による連絡手段の遮断は家族や学校の混乱を引き起こし、子供たちの引き取りや確認に困難を極めたことを示しております。

5 次に避難状況についてですが、避難したが57.1%、避難せずが42.9%でした。

6 避難経路及び子供の状況は、自宅から指定避難所、施設や知人宅、全国各地へと避難・移動し、更に転々と避難施設や形態等を変えながら数か所移動する等、我が子と共に避難することがきわめて苦難な生活であった事が多く語られていました。

特に自閉症の子供を連れての体育館や車の中での避難生活はできないため、やむなく自宅にいた例や、水や食料が無くなったのちに、東京の病院に入院避難となった事例や、避難の際の家族の絆での避難等、切実な状況

が多く記載されておりました。

7 現在の子供の様子は、大部分の子供は落ち着きを取り戻しつつありますが、心の傷は深く残り、特に避難所生活での抑圧等で深刻な状態に追い込まれた個別的事例が多く語られておりました。

更に子供たちは、被曝してしまうと繰り返し訴え、外出が減り、地震が起ると吐き気や精神的に不安定な状態になり、何年も無かった発作が起き不眠症に苦しみ、ADLの低下を示す等、個別的な変容を多く示しています。

8 そのため震災後、保護者として気を付けていることは、子供に防災ワッペンをつけさせる、防災用品の準備、吸引器の整備点検、ワンボックスカーへの買い替え、薬の多めのストック、補聴器電池の備蓄、障がい児の親としての対応や知識等の習得、子供に常備薬リストを携帯させる、子供が理解しやすい写真を見せて学習訓練をさせている等多様な対策を挙げています。これらは子供達の個々の障がい特性に応じた積極的な配慮策として示され課題提起となっています。

その他、学校・先生への要望としては、拠点校としての機能整備への期待の他、特に多かったのは障がいの理解ある企業等への就職・進路指導の充実で、わが子の将来の生き方・支え方の心配を物語っています。

なお、養護学校の児童生徒の保護者同士の横の連絡体制への指摘もありました。

9 更に国や東京電力に対しては、県民・子供たちの事を

考え正しい情報を早く出してほしい、一日も早く廃炉にしてほしい、避難所に避難したくても避難できない障がい者がいることを理解し対処してもらいたい、障がい者へも一律・規則通りで済ませようとせず、障がいとその個々の違いに目を向けてほしい、今後も危機的事態の発生の時、それを的確に伝えることができない息子の事を思うととても辛いと訴えています。

更に、行政に対しては福祉避難所の設置と看護師の配置等人的・施設設備的な内容の配慮、各種手続きの簡略化、避難できずにいる在宅者への支援物資の支給、障がい児・者の働く場所等を確保等、わが子の将来の問題に直結する要望が多くありました。

また医療施設面では、医療的ケアに必要な器材の予備を購入できるようにしてほしい、障がいのある子供の受診の際のかかわりを丁寧に傾聴とわかりやすい説明をお願いしたい等、障がい者が安心して受診や入院ができる医療機関の拡充を望んでいます。

10 最後に、地域トータルデフェンスの構築に向けた隣組や町内会の方に向けては、
・地域の障がい者や高齢者世帯の把握。

・自治会としての障がいのある子供の家庭も含めた震災対応マニュアルの作成。

・特別なことは望まないが、変な目で見たり、避けるような事はしないでほしい。

・今は子供なので親が傍についていることが多いが、もっと大きくなって成人したら、災害時には声掛けなど

をしていただきたい。

等を願い、健常者も障がい者も共に生きる同じ人間、弱いものを助けながら突然襲う困難に立ち向かえる環境をお互いが常に心がけて生活したい。

という切実な希望をお伝えして基調報告を終わらせていただきます。

以上が基調報告の概要です。

11 フォーラムのまとめ

～成果をどう生かすか

今後の課題についてまとめました。

- ① 特別支援教育の学校が災害時の避難の拠点として各種の機能・設備、備蓄、人員の配置等を整備した福祉避難所としての役割を果たすことが求められている。
- ② 保護者は各種の困難を乗り越え、障がいのある我が子を積極的に地域に出し、地域の人々の理解と支援を得る努力が必要である。
- ③ 正確な情報の把握、提供に努め、各種情報の共有化を進め。かつそれらの情報機器の活用等の使用能力を高める努力をすすめる。
- ④ 福祉避難所の設置を更に推進し、その施設の内容・方法等の実態に応じた受け入れや対処等、福祉避難所の拡充と機能の改善充実を図る。

⑤ 地域トータルデフェンスの構築には様々な連携組織・団体等が関係することが求められる。そのため各種の支援・サポート関係の活動の内容・方法や体験・知見を集積し、関係機関・人々が参集・研究し地域トータルデフェンスの構築を目指した努力が必要である。

⑥ 今後、振興会としてはアンケート調査結果やフォーラムでのご意見、ご提供いただいた資料等をもとに具体的な実施をどう進めるかを考えるべきである。

必要な組織・人々に提出し、関係する方々から更なる意見や指導等を集約しながら支援ネットワークの充実に取り組んでいく必要がある。

以上、「東日本大震災に学ぶ、地域トータルデフェンスの在り方」のフォーラムについて、その大よそをご報告しました。もとよりここで述べました事々は、福島県特別支援教育振興会いわき支部としては、組織力の面からも取り組みが困難で過大なものでありますが、読者諸賢のご意見・ご指導をいただきながら息長く調査・研究や多様な実践等を通して追究していきたいと考えております。

なお、この記事をお読みの皆様方からのご意見、ご提案等をお寄せください。お待ちしております。